

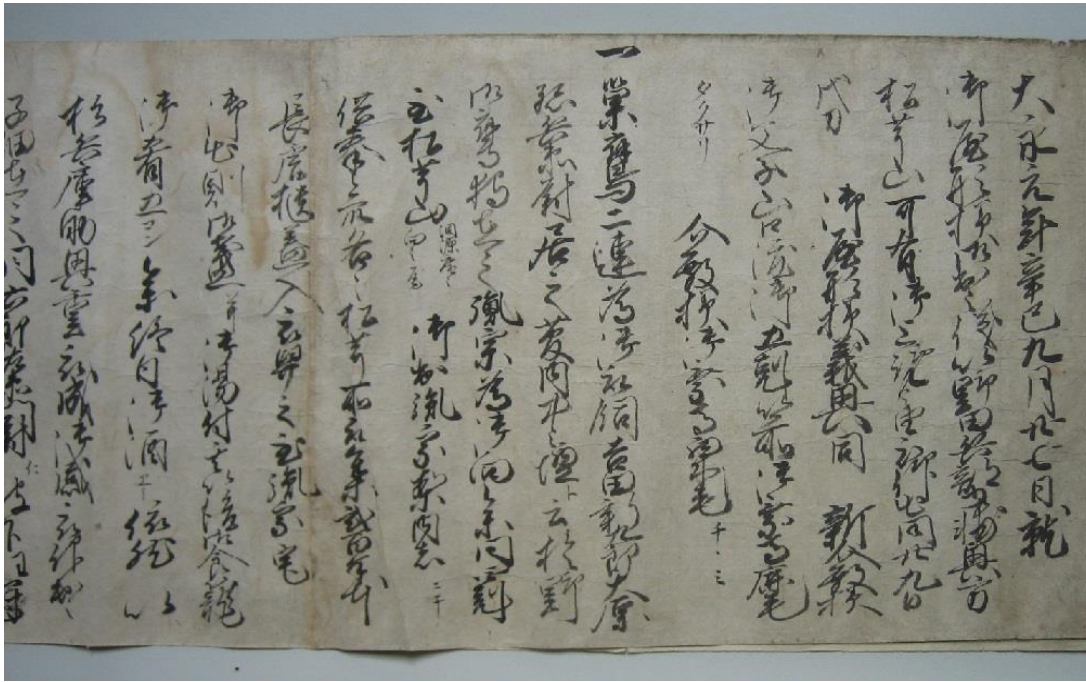
文書館
もんじょかん
動物記

書庫に棲む動物たち

②

西

たか



藤岡家文書 1「大内義興父子遊山書留」（冒頭部分）

戦国武将と鷹

戦国武将は鷹を大変好みました。鷹はいうまでもなく鷹狩りに必須であり、贈答品としても人気がありました。特に朝鮮半島の鷹は舶来品として、珍重されたようです。ここでは、大内氏と織田信長という二人の武将と鷹の関わりを紹介してみます。

1. 大内氏の鷹狩り

大永元年(1521)の晩秋に大内義興とその嫡子義隆は、供を従え、鷹狩りと松茸狩りに出かけます。その時の記録によると、五剋(午前8時前後)前に館を出発。「巢鷹」(巢から捕まえてきた鷹のひな) 2連を吉田新九郎と大原孫兵衛尉の2名が責任者として世話をし、周防国吉敷郡菅内(すげうち)の「中之壇」(現山口市)という野で鷹狩りを行っています。その後、四剋(午前10時前後)には、「松茸山」に到着して松茸狩りを楽しんでいま

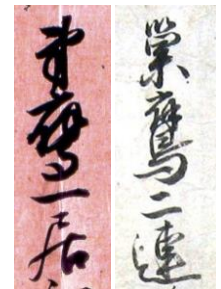
すので、鷹狩りに要した時間は移動時間を除くと、正味半剋(小一時間)といったところでしょうか。

一行は、名前が判明する者だけでも50名を数えます。その中には、問田・野田・内藤・杉といった一族・重臣や「御走衆」と呼ばれた当主の親衛隊に混じって、陰陽博士、京都から下向してきた医者、同朋衆(大名に近侍して芸能・茶事・雑役を務めた僧体の者)たちもいました。

しかし、この日の鷹狩りは松茸狩りとセットで行われ、メインは松茸狩りとその後の酒宴だったようです。したがって、果たしてこの中の何人が実際に鷹狩りに参加したのかはよくわかりません。

大内氏父子は満足したようです。今回行事(特に松茸狩りと酒宴)の世話役であり、この記録を書き留めた宮内胤宗は、後日太刀を拝領しています。

鷹の数え方



鷹は「ひともと・ふたもと」または「いちれん・にれん」と数えます。表記は「一本・二本」「一連(聯)・二連(聯)」

【本(もと)】鷹狩りに使う鷹を数えるのに用いる。(『日本国語大辞典』)

【連(れん)】鷹の数を数えるのに用いる。手につらね据えるところからいったものか。(『日本国語大辞典』)

なお、鷹匠のことを「鷹居(たかすえ)」ともいい、鷹も「一居・二居」と表記した例がまみ見られますが、その場合も、数え方は「ひともと・ふたもと」と読みが振ってあることが多いようです。

鷹狩り用の鷹の種類

	型	名称	雌雄	表記	よみ	鷹狩適否
タカ目タカ科 クマタカ属	大型	クマタカ	-	角鷹・熊鷹	くまたか	△
タカ目タカ科 ハイタカ属	大型	オオタカ	オス	兄鷹	しょう	△
			メス	弟鷹・大鷹	だい・おおたか	○
	中型	ハシタカ (ハイタカ)	オス	このり・兄鶴	このり	△
			メス	箆鷹・鶴	はしたか・はいたか	○
	小型	ツミ	オス	雀賊・悦哉	えっさい	△
			メス	雀鷹・雀鶴	つみ・すずめたか	○
ハヤブサ目 ハヤブサ科 ハヤブサ属	中型	ハヤブサ	-	隼	はやぶさ	○

2. 鷹をもらった信長

織田信長も他の戦国武将の例に洩れず、鷹狩りを大変好んだといわれています。したがって、信長と誼を通じようとする各地の武将にとって、鷹は有効な贈り物の一つでした。

戦国時代の瀬戸内海最大の海上勢力で「海の大名」ともいべき能島（のしま）村上氏も、信長に鷹を贈って、歓心を買っていることを示す手紙が当館に遺っています。内容を意識すると、以下ようになります。

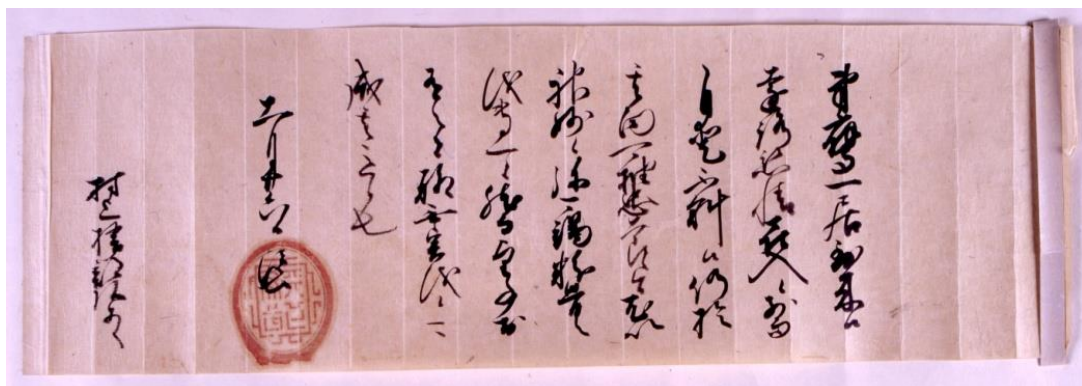
「雌の鷹が一羽届いた。遠いところ親切な心遣いを大変喜ばしく思う。特別に大変大事にしている。よって、その方面において私に対して忠義を尽くすつもりだという旨は、非常に殊勝なことである。今後ますます他を顧みずに尽力するように。次に、望みがあるのであれば、自分としてはまったく異論はない。気にかけておかつもりである。」

末尾の一文「お前の望みについては、気にかけておいてやる」とは、何と偉そうな物言いなのでしょうか。

この手紙は、①相手の名前の書き始めの高さが、日付のそれよりも低い位置に書かれてある、②相手の名前の末尾に添えられた「殿」の字がひらがなに見えるくらい崩れている等、その形式も相手に対する敬意の度合いが低いもの（薄礼）となっています。

この手紙は、天正7～9年（1579～81）頃のものと考えられます。天下人の座をほぼ手中にした信長の思い切り「上から目線」の手紙といえるのかもしれませんが。

ところで、能島村上氏はこの鷹をどこから入手したのでしょうか？能島村上氏は瀬戸内海だけでなく、関門海峡を越えて九州の諸勢力とも交流を持っていました。彼らは海の世界を通じて外国とも盛んに交易を行っていました。そういったことから想像をたくましくすれば、あるいは彼らとの交易を通じて手に入れた朝鮮の鷹だったのかもしれませんが。



村上家文書 5「織田信長朱印状」